

口腔インプラント手術に歯科麻酔科医がサポートできること

— いなくても手術できるでしょ！は危険？ —

小谷 順一郎

口腔インプラント手術は手術自体に専門性が求められるのは当然のことですが、全身管理の面からみても他の歯科治療と異なる点を多く有しています。対象となる患者は、高齢者で内科的有病率が高く、手術自体にも数多くの特殊性があります。例えば、局所麻酔下手術としては長時間の上気道手術であること、極めて規格化された精巧な手術であるため術中は開口状態を維持しながら静止状態を保たなければならないこと、多量の注水を行うこと、清潔環境下での手術が望まれるためドレープで顔面を覆ってしまい表情をとらえにくいこと、などはすべてリスクファクターとなり、これらを認識して手術に臨む必要があります。また、歯周組織や骨再生のため生体由来材料を使用することも多く、アレルギー反応への配慮も必要となります。2年前から新型コロナに対するワクチン接種の重篤な副反応の1つとしてアナフィラキシーが生じるという情報が国民に知れ渡るようになり、病態や治療に関する知見がマスメディアを通じて伝えられています。インプラント医療のみならず歯科医療環境の中でも数多くの医薬品やラテックス製品が使用されており、歯科医師にもアナフィラキシー発症時の初期対応に関する知識と技能が求められるところです。

最近では、生体モニター管理による安全性と鎮静法の応用による快適性の提供が、インプラント手術のクオリティを向上させ、術者、患者の両者に喜んでもらえるということが認識され、歯科麻酔科医がインプラント手術に関わるようになってきました。本講演では、安全に手術に臨む上での口腔インプラント手術の特性にもとづいた全身管理の要点や、重篤な偶発症であるアナフィラキシーの病態、診断、歯科医院での初期対応、他の偶発症との見分け方などを中心に、これまで静脈内鎮静法を併用したインプラント手術の全身管理に数多く携わってきた演者の経験から歯科麻酔科医がサポートできることを解説したいと思います。

(略 歴)

1973 年 大阪歯科大学卒業

1974 年 名古屋大学医学部助手(口腔外科学講座)

1983 年 大阪歯科大学講師(歯科麻酔学講座)

2002 年 大阪歯科大学教授(歯科麻酔学講座)

2014 年 大阪歯科大学名誉教授

2014 年～現在 歯科麻酔サポート専門クリニック「TRIP DOCTOR」メンバー

(学会活動)

日本歯科麻酔学会名誉会員、日本口腔科学会名誉会員、日本有病者歯科医療学会

名誉会員、アジア歯科麻酔学連合会長(2014) 日本歯科医学会会長賞(平成 27 年度)など